

魚津の教育

魚津市教育センターだより176号

令和7年3月発行

魚津市教育センター

〒937-0053 魚津市林町1-21

TEL (0765) 23-9161

『大きな区切りを前に』

魚津市立経田小学校 校長 土開 晴美

「でもしか教師」という言葉をご存じだろうか。これは、第二次世界大戦終了後から高度成長期、教師の採用枠が急増し、教師の志願者のほとんどが容易に就職できた時代に、「他に仕事がないから教師にでもなろう」「何も特技がないから教師にしかねない」というような消極的な理由から教職に就いた教師の蔑称である。

私は中学生の頃から、一生食べていけるしっかりとした職業に就きたいと考えていた。どんな仕事がいいか・・・そうだ、教師にでもなるかと考えたのである。そのころの私はどちらかというところ「子供は少し苦手」な人間であったにも関わらずである。「でもしか教師」の時代は、私が教職に就いた時代とは少し違うが、ある意味、私も「でもしか教師」だったと言えるかもしれない。

長い教員生活もこの3月で大きな区切りを迎えようとしている。今までを振り返り、心に残っていることを3つ紹介する。

1つめは初任時代。同年代の同僚が多く、少し上の先輩と食事をしたり、遊びに行ったりする中で、仕事に関してのアドバイスをたくさんいただいた。初任研の公開授業をした際は、次の日、ベテランの先生から「昨日、いろいろ考えたんだけど、こうしてみたらよかったんじゃない。」と教えていただき、新人の私のために、時間を割いて考えアドバイスをくださったことに感激した。また、子供たちが家から持ってきてくれた花を生ける花瓶がなく困っていると、数名の保護者から「これ、使って。」と花瓶をいただいたこともある。若い担任を温かい目で見守り、応援してくださる保護者の皆様にも感謝しながら過ごした毎日だった。

2つめは海外派遣教員としてソウル日本人学校で3年間勤務したことである。日本全国から派遣された方々と仕事をする中で、私よりもずっと若い方が学校を組織として捉え、全体のことを考えて仕事をしていることに気付いた。本来であれば、既に気付いているべき年齢であったのだが、環境が変わったことでようやくそのことに思い至った訳である。また、教職員が共通理解して取り組むことの大切さもここで実感した。年度初めに配付された分厚い資料と4時間続いた職員会議は忘れられない。

3つめは管理職として勤務したことである。今までとは違った立場や視点から学校や子供たちを見ることで、学校は地域の方々をはじめ、たくさんの人々によって支えられ、大切にされていることを改めて感じた。そして、地域の中で子供たちにはどのようなことが求められているのか、どのような子供たちを育てていかなければいけないのかを真剣に考えるようになっていった。さらに、全教職員で同じ目標をもって取り組んでいくやりがいや子供たちの変容を感じたときの喜びもまた格別であった。

「でもしか教師」だった私は38年を経ようとする今、「教師になってよかった」と心から感じている。「少し苦手」と思っていた子供たちは、今は愛おしく大切な存在である。私がこのように変わったのは、諸先輩方や地域の皆様、保護者の皆様、共に働いた教職員の皆様、何より一人一人が自分の目当てに向かって一生懸命伸びていこうとする子供たちのおかげだったのは間違いない。

「教師」は魅力的な職業である。様々な方と力を合わせ、たくさんの方の成長の過程に関わることができることは、素晴らしいことだと思う。残念なことに昨今、教員採用試験の倍率が低下し続けており、若手の離職も増加傾向と聞く。しかし、小中学生が将来就きたい職業の上位に教師が常にランクインしていることも、毎年、新採教員が大きな希望を胸にこの世界に入ってくることもまた事実である。若手はもちろん、現在、教職員として勤務している方々が、未来を信じ、笑顔で子供たちに向き合っていくにはどうしたらよいか、立場が変わっても、考えていきたいと思う今日この頃である。



令和のとやま型教育推進事業 魚津市の取組報告

魚津市では市内全小中学校で「問題発見・解決型学習」をテーマに、とやま型学力向上プログラムⅢ期と一体的に研究を推進しました、令和5年度より継続して取り組んでおり、本年度も更なる授業のアップデート（授業改善）を目指しました。



各校での取組について紹介します。テーマに沿った充実した研修が行われたことが伝わってきます。

<学習内容を焦点化した学習課題の工夫> 道下小学校

5年 算数科「ならした大きさを考えよう」

本時の導入では、前時の「平均を求める問題」と本時の「0の記録がある平均を求める問題」を提示し、問題の相違点について話し合いました。「0は個数として考えてよいのか」という児童の問いから、本時の学習課題を「数に0があるときの平均の求め方を考えよう」と設定しました。これによって本時の学習内容が焦点化され、何について考えるのが明確になり、授業を通して児童は、何が分かったのか、何ができるようになったのかをより実感することができました。

<児童の意識に寄り添った課題づくり、板書の工夫> 清流小学校

6年 算数科「分数でわる計算を考えよう」

前時までに学習したことを想起できるように、まず既習の計算の仕方を確認しました。その後、本時の問題を提示し、今までの問題と違うところはどこかを問いかけ、そこでの児童のつぶやきを基に、課題づくりを行いました。

また、児童の思考を構造的に板書することで、考えを比較し、よりよい考えに気付いたり、新たな方法を吟味したりする姿が見られ、「できた」「分かった」という実感へとつなげることができました。



<児童の考えたいという意欲を高める教材提示の工夫> 経田小学校

4年 社会科「ごみのしよりと利用」

導入でいろいろなごみが混じったごみ袋を提示することで、児童は生活経験から分別の間違いを指摘し、学習内容への興味・関心を高めていきました。

その後、実際に分別する活動をグループごとに取り入れることで、分別の仕方について児童の中で曖昧な点、迷った点、他のグループと違っていた点に気付き「正しい分別方法を知りたい」と自ら課題を設定することができました。



<単元全体の活動の見通しをもたせる課題提示の工夫> よつば小学校

4年 学級活動「4の2のシンボルキャラクターをつくろう」

学級のみんなが親しみをもつ学級のシンボルキャラクターをつくるために、繰り返し話し合いに臨みました。最初に「何のためにシンボルキャラクターをつくるのか」「どのように活用するのか」学級全員と教師でイメージを共有しました。

その結果、活動のゴールに向けたそれぞれの話し合いで課題意識が高まり、一人一人が切実感をもって問題を解決しようとする姿が見られました。



<児童の必要感を生み出す課題設定の工夫> 星の杜小学校

5年 外国語科「What would you like? ～サプライズ!○○さんに
ふさわしいランチメニューをつくって喜ばせよう!!～」

相手の好みに合わせたメニューをつくるという目的意識をもたせ、お店で値段、味について店員とのやり取りが必要な状況をつくりました。さらに「値段を伏せての商品提示」「裏メニューの設定」によって、店員とお客の、その場での「生きたコミュニケーション」が生まれ、児童は既習の表現を利用しながら主体的、対話的にコミュニケーションを図ることができました。



<既習内容と関連させた課題提示の工夫> 西部中学校

2年 数学科「図形の性質と合同」

導入で本時の課題が既習内容とつながっていることを確認したことで、生徒は「分かるかもしれない」「解けそうだな」と見通しがもて、課題解決に対する意欲を高めていました。

また、共同編集可能なPowerPointを活用して他の生徒の考えを閲覧できるようにしたことで、他者の考えから新たな気付きを得たり、自分との考えの比較から「なぜそうなるのだろう」と新たな疑問をもったりすることができ、自己調整しながら課題解決に取り組む姿が見られました。

<「気付き」と「疑問」からの課題設定の工夫> 東部中学校

2年 理科

実験結果やグループ発表を聴いた後、生徒の「気付き」と「疑問」から、課題設定を行い、授業を展開しました。

また、解明・解説を生徒に委ね、不足を教師がサポートするようにしました。生徒は「ただ授業を受ける、先生の話聞くだけのこれまでの授業よりも、自分たちで解決するのは難しかったが、より理解することができた」という感想をもつなど、生徒自身が問題解決していると実感することができました。

魚津っ子の学び向上委員会の取組と成果

学力向上部会



「教頭会」の主な取組と成果

- 各学校の学校訪問研修や校内研修を掲示板で周知し、学校間（同校種、異校種）で授業を互見する機会を積極的に得られるように、**参観機会の確保、時間割変更等**に努めました。参観したのべ**66名**から「課題意識の高まり」「自己調整」についてのアンケート回答があり、特に「課題設定、提示の工夫によって児童生徒が自分たちの課題として捉えて学習している様子が伝わってきた」という記述が多く見られました。今後は小学校、中学校間の学びのつながりをイメージできるよう、**小中間の互見授業の機会をさらに増やし**、教員同士の学び合いを進めていきたいと考えています。

「教務主任会」の主な取組と成果

- 児童生徒の学びの場や学び方が多様化していることを踏まえ、**学事に関して文科省の方針に基づいて資料を作成**しました。学籍や不登校児童生徒の出欠、行事の時数等について、各校で統一されていなかった捉え方や書類への表記の仕方について話し合い、校長会の助言を受けながら、資料を整理し、冊子としてまとめました。
- 主体的な学びの出発点となる「**問題発見**」の過程を大切に**した授業改善**に取り組みました。問いを引き出すような様々な教材提示の工夫により、児童生徒は課題意識を高め、解決への見通しをもって、学習を進めていました。
- 各校の教員研修において、授業改善や学びの環境づくり、ユニバーサルデザイン等、必要感のある内容が積極的に取り上げられるようになりました。

心の教育推進部会



「教頭会」の主な取組と成果

- 各校の教育指導計画に「**ふるさとキャリア教育 グランドデザイン**」を掲載し、それに基づいた実践に取り組みました。実践後に見えてきた成果や課題について共有し、グランドデザインがより活用しやすいものとなるよう、今後も修正を行っていきます。
- 令和7年度末完成を目指し「**ふるさと魚津カルタ**」の制作を進めています。今年度は、市役所等に協力を得ながら、既存の写真等で絵札として使えるものの有無を確認し、必要に応じて実際に取材するなどして札をそろえました。魚津市内の児童生徒の学びにつながるものかを確認しながら完成を目指していきます。

「生徒指導協議会」の主な取組と成果

- 年度当初(4月)に**啓発リーフレット**を配布、活用を呼び掛けたことで、児童生徒や保護者と、いじめやネットトラブルについての認識を共有し、防止に向けた意識を高めることができました。
- SNSのトラブル等、学校だけでの対応が困難なケースについては、**警察と連携・協働**して対応することができるようになりました。(6月魚津市教育委員会よりお知らせの配布)
- 今後、**児童生徒がSOSを出しやすい**、教員が対応しやすいアンケートの在り方について、端末を利用した先行事例等を参考に、考えていきます。
- WEBQU調査を活用**し児童生徒、学級づくりへの支援をより充実させていくために、結果の生かし方や支援の仕方について校内研修を通して学年や学団で共通理解しながら、継続的・組織的に取り組んでいく必要があると考えています。

内地留学を振り返って



「内地留学を終えて」

魚津市立西部中学校 寺田 雄一郎

せっかく学ぶのであれば、本物に触れたいと思い、東京に行くことを決めました。大学での講義や講演会、レポート作成、ゼミでのディスカッション等を通して、学校心理学を中心に学び、生徒指導に新たな視点をいただきました。今、学校に求められる生徒指導の在り方として、「一人一人のウェルビーイング」「一体感より多様性」「チーム援助」「生徒指導は生徒支援」等、浮かび上がるキーワードとこれまでの教員生活で体感してきたことが、納得と反省でつながりました。また、一旦現場を離れることで、富山の教育、労働者としての教員、自身のキャリア（教員としてのキャリアではなく、ライフキャリア）を客観的に捉える機会にもなりました。

県外から富山県の中学校に赴任して8年が経過していましたが、考え方や学校を取り巻くシステムの違いによる“違和感”を抱えたまま、日々過ごしていました。それに加えて、部活動の地域移行、学校行事の縮小、チーム担任の導入等、過渡期にある学校現場の現状に迷走・・・まさにミッドライフクライシスでした。そんな中、一旦立ち止まって、これまでのことと、これからのことを考え、整理する機会を内地留学という形で与えていただけたことは、自分にとって大きな価値がありました。3カ月間の研修で学んだことを、少しでも地域や社会に還元できるよう、日々精進したいと思います。

最後になりますが、今回の内地留学のチャンスを与えてくださいました魚津市教育委員会事務局の皆様方、鍋島正茂校長をはじめとする西部中学校の諸先生方に、心より感謝いたします。



研究会の報告 ～情報教育研究会～

情報教育研究会では、夏期休業中に行った情報教育研修会、3回の定例会を行いました。12月6日（金）の第2回定例会では、端末を使った授業実践や校務での活用例を持ち寄り、発表、協議しました。

【授業実践例】

- ・単元を通しての端末の活用場面を示すことで、児童が見通しをもって活動を進めることができた。
- ・自分の思考を可視化して伝えたり友達の考えを全員で追体験したりすることで学びが深まった。
- ・授業の導入でフォームを用いて問題を提示し、課題意識をもたせた。
- ・課題解決の場面で端末を持ち運びながら意見を交流し考えを深めた。 など

【校務での活用】

- ・様々な場面での Teams が活用され、連絡ツールやオンライン会議としての使用も広がっている。
- ・一部では採点分析システムの活用により、テストの採点時間が短縮されている。 など

【端末活用の課題】

- ・ネットワークがつながりにくい時間帯がある。
- ・端末を使う場面が限定され、児童生徒が「道具」として活用するところまでは進んでいない。（学習規律の定着や発達段階による）
- ・教師により端末の活用頻度に差がある。 など



来年度は、端末の更新を控えています。まずは教師が端末を使いこなすことで児童生徒に還元できるとの思いを大切に、情報教育研究会が中心となって教育DXを推進していければと思っています。

市教育支援センター「すまいる」の利用状況

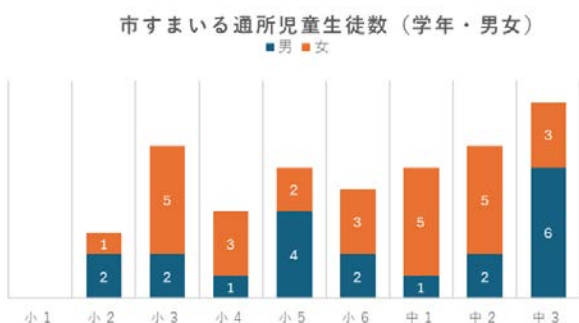
市教育支援センター「すまいる」は、

- ・学校に行けない児童生徒及びその保護者を対象に、居場所づくりをすることで心の安定を図る。
- ・各種体験活動や学習支援を通して自己を肯定する心を育て、社会（学校・地域）参加の意欲を育てる。

をねらいに、運営をしています。

また、今年度から各小学校に設置された校内教育支援センター（校内すまいる）とも連携し、指導員が校内すまいるを訪問したり、校内すまいる研修会にも参加したりして各校指導員とも情報交換をしています。今年度の利用状況、活動を紹介します。

【市すまいるの利用状況】



※2回以上通所した児童生徒の実数
 ※小学生計 25名 中学生計 22名

【教育相談・教育相談電話の利用状況】

市すまいる通所延べ人数	
小学生	844人
中学生	524人
合計	1368人
1日平均人数	9.2人
1日最多人数	17人

	(件)	
	来談相談	電話相談
令和4年度	178	489
令和5年度	335	1077
令和6年度	371	1094

【令和7年2月末現在】

【令和7年2月末現在】

【市すまいるの活動】

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
・お花見	・野菜の苗植え	・釣り	・1学期お楽しみ会	・登校日（2回） ・村木地区夏祭りへの参加	・釣り	・野菜の収穫	・秋の遠足（吉田科学館）	・2学期お楽しみ会	・新春卓球大会 ・魚津水族館見学 （市バス利用練習）	・立山青少年自然の家での自然体験（雪遊び） ・豆まき	・卒業を祝う会

【常時活動】・学習活動・スポーツ活動・栽培活動・制作活動・公園での活動・英語活動（E・Eタイム）・自由交歓活動・市立図書館利用（月1回）・お茶の稽古、創作活動（保護者、OB保護者による指導）・清掃活動・買い物体験（2回程度）・にこにこタイム（指導員との定期的な面談）



夏祭り



秋の遠足(吉田科学館等)



釣り

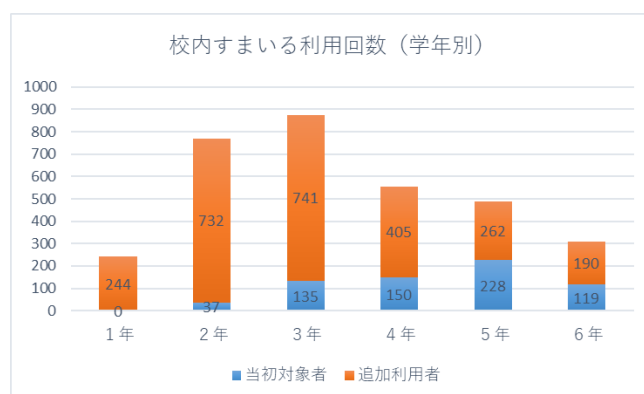
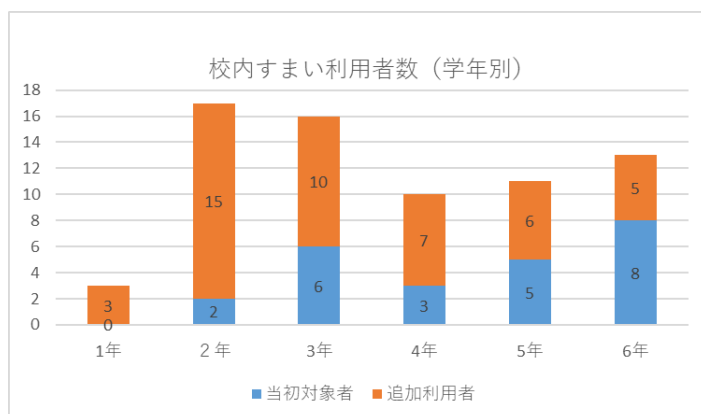


「校内すまいる」の運営を振り返って

校内教育支援センター（校内すまいる）が設置され、1年が過ぎようとしています。1年間の運営について、市全体の利用状況と各校の現状について振り返ってみました。

～校内すまいる利用状況～

4月当初は不登校児童生徒の学校復帰を支援（令和5年度欠席人数90日以上の児童を対象）とし、その後、不登校の未然防止のため、登校しぶりや教室の学習に不応が見られる児童の利用対象者を拡大しました。



当初対象者24名の状況

主として自分の教室	6名	校内すまいる 利用回数 669回	市すまいる 利用回数 583回
主として校内すまいる	8名		
主として市すまいる	4名		
校内・市すまいる併用	5名		
両方利用なし	1名		
対象者合計	24名		

- ・市全体では、校内すまいるは2年生、3年生の児童の利用者数、回数が多い。
- ・「児童の居場所」として、「校内すまいる」という選択肢が増え、自分にあった居場所を見つけることができるようになったと考える。

（当初対象者24名、未然防止のための利用者46名 計70名 2月末までの利用状況より）

～各校の「校内すまいる」より～

「校内すまいる」の運営について、各校の担当者に1年間を振り返っていただきました。

教員間の情報共有（情報交換や記録ファイルの回覧）を密にし、指導員のみならず全教員が一度は校内すまいるでの指導を受けもつなど、全校体制で対応してきた。これらの支援が奏功し、不登校傾向だった児童の登校や学校での滞在時間が増えたり、教室での学習に参加しづらい児童が指導員や教員との学習や関わりを通して心が安定してきたりと、一定の成果が見られた。一方、個々に応じた長期的な視点による支援策と保護者との情報共有には改善の余地がある。

（星の杜すまいる）

教室に入ることを苦しいと感じた児童が「『すまいる』なら行けた、楽しかった、言いたいことが話せた」とつぶやいたことが一番の成果だった。その児童の声を引き出したのは、指導員の豊かな経験に裏打ちされた適切な言葉かけや児童に寄り添う温かい対応である。多くの教員で児童が興味をもつアイデアを出し合い、活動に生かした。

今後の課題は、児童の実態に合わせた運営の方向性を決め、情報を共有し、よりよい環境を整える必要があることである。

（清流すまいる）

3学期を迎え、個人差はあるものの「よつばすまいる」を利用する子供たちの表情が豊かになってきている。心がけてきたのは、「よつばすまいる」は、子供たちが日常を楽しんでいると感じ、自己実現の喜びを味わうことができる安心の居場所であるということ。現在、子供たちは登校すると、一日の予定を自分で決めて取り組み、帰りには指導員やカ指との対話を通して振り返りを行っている。日々の小さな変容について、送迎に来た保護者と共有する時間も大切にしている。個々に抱える課題は違い、アセスメントや個に応じた支援に悩みながらの毎日ではあるが、これからも結果を焦ることなく、目の前の子供たちの将来を見据えて寄り添うことを大事にしていきたい。

(よつばすまいる)

担任、教育相談コーディネーター等の連携を大切にして対応してきた。そして、児童と保護者の心に日々寄り添い、学校の中で安心して過ごせる居場所となるよう努めてきた。初めは母親から離れられなかった児童も、今では発表会で友達とダンスを踊ったり、自分で選んで授業に参加したり、友達と給食を食べたりと、少しずつ行動範囲を広げ前に進んでいる。これからも、学校全体で支援していきたい。

(経田すまいる)

道下小では心おだやかに過ごす時間を大事にしようと考え、学校で過ごす環境（場所、時間等）を子供たちと共に整えることから始めた。自分でチャレンジしたいこと（学習、運動、創作活動等）の予定を立てることを通して自分なりに集中して取り組みたい気持ちが高まってきている。また、人と関わり合いながら活動したいと望む子供たちには、友達の予定を参考にしながら相談して決めていくよう声がけすることで、友達と共に生き生きと取り組む様子が少しずつ見られるようになってきている。学校が安心して過ごせる居場所となるよう引き続き支援に努めたい。

(道下すまいる)

書籍・教材の紹介



PICK UP!

今すぐできる ゆかいなエクササイズが満載!楽しみながら、マインドフルネスしよう!
(学級レク、SST 等で)

集中力 Up
身体に意識を向ける
心が落ち着く

今年度、生徒指導協議会で購入した書籍・教材です。ぜひ活用してください。



10年後の子どもに必要な「見えない学力」の育て方	木村泰子	“令和型不登校”対応クイックマニュアル	神村栄一
子どもたちの行動を決める学級の「空気」	河村茂雄	マンガでわかる! 学校に行かない子どもが見ている世界	西野博之
いじめの「空気」は変えられる! 教室の小さな変化の起こし方	諸富祥彦	「支える」生徒指導 わたしの小さな実践事例集 月刊生徒指導 2024年12月増刊号	西村晃一
教室マルトリートメント	川上康則	愛着障害は何歳からでも必ず修復できる	米澤好史
つながりをつくる10のしかけ	上條大志	特別支援がガラッと変わる「見取りのモノサシ」	渡辺道治

今年度、情報教育研究会で
トイ・ドローンを購入しま
した。プログラミング学習
に活用できます。ドローン
の他に、ビデオキャプチャ
ーも購入しましたので、ぜ
ひ活用してください。

PICK UP!



トイ・ドローン Tello
(ケース付き)×5台
プログラミングアプリ
Scratch で操作が可
能。安定した飛行でド
ローン操作の楽しさを
味わえます!

学びを生かして～若手教員研修より

若手教員研修では、受講後、研修から学んだことを2学期に実践し、その成果と課題について報告してもらいました。いくつか紹介します。

今、目の前にいる児童をどう支援するかだけではなく、将来その児童が目指すべき姿を明確にもった上で、その姿を目指すために今できる支援を考えていくことが必要だと学んだ。特別な支援を必要とする児童は、すぐに課題が改善したり言動が変わったりするわけではないため、「中学校に行ったときに」「大人になったときに」どうなっていれば過ごしやすいかを考えていくことが大切なのだと学んだ。

他校の先生方と交流し、協議したことで多様な考え方を吸収することができた。また、同期の先生方はもちろん、1年次、2年次の先生方の頑張りや考え方による刺激ももらった。2学期取り組んだことやチームの先生方との連携により、担任するクラスの活動の様子や雰囲気はよくなったと感じている。チーム担任制のよさを最大限に生かし、生徒と共に居心地のよい学校・学級づくりを目指したい。

集団での活動に適応できない児童をただ「困った子」として見るのではなく、その特性をよく理解した上で、得意なことや力を発揮できる場所はどこなのかを考えるようになった。今後は、今まで以上に一人一人をよく見て、それぞれに合った支援ができるようにしたい。また、そのためにも、他の先生との相談や情報共有、そして自己研鑽も欠かさず行っていきたい。



研修で学んだことをその場限りのものとせず、実践し振り返る、そこから新たな課題を発見し、その解決に向けてさらに意欲を高めていく。若手教員の真摯に学ぶ姿が伝わってきます。

～Column～

「すまいる」に通所する子供たちの姿から日々学ぶことがたくさんあります。

3学期、高校受験に向かう中学3年生は、学習の追い込みとともに、面接等に備えこれまでの自分を見つめ直していました。学校への行きづらさを抱え、悩み、葛藤してきた自分と向き合うことは大変なことだと思いますが、それを言葉にして書いたり伝えたりする中で、少しずつ自信をもち、成長していく姿には目を見張るものがありました。これまでの自分を認め、これからの自分について考えていくために、じっくりと自分を見つめる「時間」と「居場所」の大切さを感じました。

学校への行きづらさを抱える子供たちは増え続けています。子供たちが安心して過ごせる時間と居場所はどうか。これからも考え続けていきたいと思っています。

A.H.